牧　太郎著

新聞記者で死にたい

障害は「個性」だ

中公新書

1411

中公新書 1411

牧 太郎著

新聞記者で死にたい

障害は「個性」だ

中央公論社刊

牧　太郎（まき・たろう）

1944年（昭和19年），東京に生まれる．
早稲田大学卒業．毎日新聞記者，「サンデー毎日」編集長などを経て，現在，毎日新聞編集委員．
著書『小説土光臨調』（角川文庫）
『「サンデー毎日」編集長日記』（三一書房）他

新聞記者で死にたい
中公新書 *1411*
©1998年
検印廃止

1998年4月15日印刷
1998年4月25日発行

著　者　牧　太郎
発行者　笠松　巌

本文印刷　三晃印刷
カバー印刷　大熊整美堂
製　　本　小泉製本

日本音楽著作権協会(出)許諾
第9800986-801号

◇定価はカバーに表示してあります．
◇落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛にお送りください．送料小社負担にてお取り替えいたします．

発行所　中央公論社
〒104-8320
東京都中央区京橋 2-8-7
電話　販売部 03-3563-1431
　　編集部 03-3563-3666
振替　00120-4-34

Printed in Japan　ISBN4-12-101411-1 C1236

〈目　次〉

一、ある夜、脳が破壊された！　2

右手が、動かない！　その前兆――街が真っ暗になった　週刊誌編集長　「中吊り広告」を作らなければ　「地雷」を踏んだ「お金、お金だ」　凍えそうな「臨死？　体験」　鼻から尿管までチューブが

二、家族の名前が喋れない　21

喋れない！　「粗相」をして気づいた失語症　「高校三年生」を歌った　すべてが「シロウ」になってしまう　リハビリ開始　編集長解任通告　「失語症」の田中角栄　死にたい！　死への誘惑　脳卒中患者がガンで死ぬ　残酷な「廃用手」宣告　宗教への誘い

三、地獄――社会との断絶、会社との断絶　43

気がすすまない障害者手帳　初めての手紙　「ひょうたん島」の教訓　尿検査の悲惨　迷惑な〝病室リポート〟　唖然とし

た裁判結果
四、「オウム」の恐怖　59
拉致されるかもしれない　これは「経済カルト」だ　タブーへの挑戦　麻原がやって来た　家に帰れない　サラリーマン編集長の危機　初めての「被告」　坂本弁護士が消えた！　「殺すのなら牧さん」
五、脳卒中患者の「リストラ」と「離婚」　80
「本にしろ！」　「会社人間」の苦悩　「六ヵ月で毎日新聞に戻れ！」　「あとがき」が書けない　センベイの秘密　去っていく妻たち　退職金の「通帳」と共に
六、競馬が身を助け、悪友が——　94
「弱脳」。マンガさえ読めない　月五十万円の病院代　競馬の成績、九勝三敗　「小説サンデー毎日」を作ろう　誤解　一人だけのパーティー
七、「復職率五パーセント」の憂鬱　107
ロッキード事件のあの時　勤続二十五年の金一封は　復職率五パーセント　夢精した　人間は死ぬんだ　元沖縄大使の死

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

八、捨て身の生還作戦　120
仲人を断わる悲哀　「リハビリ」の語源　僕のテーマソングは
「上を向いて歩こう」　「装具」が短くなった　自宅リハビリを
選んだ女性　病院を転々とする患者　「記憶喪失」かしら
失語症のイバラの道
九、病院から出社してみた　138
「幸せ」にヤキモチを焼いた　「教祖の代理」も来る　「編集長
日記」がやっと本になった　車椅子の散歩　会社へ行きたい
十、ワープロが僕を助けた　151
出社してはみたが　ワープロが一日に五行　ライバル社の親友
「夕刊フジ」が書いてくれた
十一、歩けた！　退院だ　162
立てる！　直立猿人だ　七夕に売文の決意　一種一級の障害者
手帳　臨時外泊。ビールがまずい　退院の日、銀座四丁目を歩
く
十二、〝天敵〟中曾根元首相の手紙　174
退院しても仕事はない　「幻の特ダネ」の思い出　国家秘密を

スッパ抜いた
十三、卑劣なオウムの紙爆弾 183
電話交換嬢から届いた花束　「契約の書」のトップ記事
十四、障害者の大先輩 190
〝東京オリンピック〟に倒れた　原因不明。三十二歳の脊髄損傷
「雲にのりたい」　「車椅子で、国会に行こう」　国会からカラオケ教室へ　神楽坂の身障者マラソン
十五、踏切を渡る〝恐怖〟、職場に戻る〝恐怖〟 203
「踏切」に挑戦するぞ　障害者がナンパする意味　仕事を与えられない苦痛　リストラの嵐って、本当なの？　初仕事は「リストラの実態」　「神主」の人生相談　七つの顔を持つ男
十六、「瞼の父」は新聞記者だった 217
「柳橋・深川亭」の家訓　出生の秘密　実父に会いたい！
父が死んでいて、ホッとした
十七、牙を剝いた「オウム」 228
「卒中前」と「卒中後」の価値観　窓際へ行け！　「新聞に帰ってこい」と親友は言った　怪文書　オウムは弾けた　僕に与

えられた使命
十八、新聞記者で生き、新聞記者で死にたい　243
殺す相手は「牧太郎」だった　再発の病室で書いた　〝ゆるみ〟
ある新聞記者で死にたい　障害は「個性」だ
あとがき　254

新聞記者で死にたい

一、ある夜、脳が破壊された！

右手が、動かない！

「地雷」を踏んだ。

安心しきっている己の人生に「地雷」が仕掛けられているとは、思いもよらなかった。突然、足元が直下型地震にあったように、ガラガラと揺れ、もろくも、僕の肉体は崩れ落ちた。

一九九一年十二月四日午後七時三十分。

皇居が見える東京・大手町、パレスホテルのパーティー会場で、僕は挨拶をしていた。いつものように、拍手を浴び、演壇を降りようとした瞬間だった。

身長百七十五センチ、体重六十七キロの体が、グラッと来た。

「どうしたんだろう？」。体が大きく右に傾いた、ような記憶がある。

近くの人が、駆け寄って、体を支えてくれた。

どうしたのか。体の細胞の一つ一つから血の気が失せるような気がしたが、辛うじてバランスを保っている。気分がひどく悪い。ムカムカする。会場を出て廊下の長椅子に座り込んだ。

一体、どうしたというのだ。風邪だろうか。最初はそう思った。会場を辞し、家に帰ったほうがいいかもしれない。むかつく。視界が徐々にだが、狭くなっていくような気がする。風邪だろうか。いや、そんな生やさしいことではない。肉体に何か致命的な異変が起こっているのかもしれない。

トイレに入った。小便は普通だった。量、色。普通だった。が、少し気になるのは、放尿にいつものような勢いがない点である。廊下に戻った。相変わらず、気分は悪すぎる。

救急車を呼ばなければいけない。

ソファーにもたれて、救急車を呼んでもらおうと「おーい」と右手をあげようとした途端である。右の手がまるで動かない。腕はダランとして地面を指しているように、見えた。

ひょっとすると——。

「病院に連れていってくれ」。そこまで言うと僕は意識と格闘し始めていた。

「地雷」を踏んだ——と瞬間的に思った。

四十七歳だった。〝働き盛り〟だった。

仕事が楽しかった。遊びも楽しかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

颯爽とした毎日だった。刺激的で、その癖、平坦な毎日に「地雷」が仕掛けられていた。何が起こったのか、わからないまま、僕は三日三晩、意識不明が続いた。

その前兆――街が真っ暗になった

その前日、何となく、その前兆はあったような気がする。

僕は講演を頼まれ、青森県十和田市にやって来ていた。

人口六万人。十和田市は、八甲田山の噴火でできた「火山岩第三紀層火山灰土壌」にあった。「観光地・十和田湖」とは、かなり離れた町で、昔は「人の住めない荒涼たる平原」だった。雨水は地中に染み込むばかりで、井戸を掘っても水は出ない。暑さ、寒さを遮る樹木もない。夏は炎暑。冬は西北の風が強く、八甲田おろしの物凄い吹雪で、人々は凍死する。少なくとも、三百年ほど前までは、とても人間が住むところではなかった。

会場に案内してくれた地元の有力者の説明を聞きながら「それにしても、寒い」と呟いていた。「寒い寒いと三本木平ッ寒い　二度と行くでない三本木平ッさ」――と、盆唄に歌われるほどだから、寒いハズである。ひょっとすると、氷点以下かもしれない。

街にヒューヒューと西北の風が吹いていた。なぜか、十和田市は、今までに、行ったことのない寂しすぎる「暗闇の街」のように思えた。

現在の十和田市は、寒さこそ厳しいが、実際には暗い寂しい街ではもちろんない。官庁街には、観光スポットとしても有名な桜並木が作られている。新しい街作りに向け、活気あふれる街である。それが、寂しすぎるように思えてならなかったのは「倒れる前兆」だったのだろう。街全体が、薄暗く見えた。部屋に入っても、天井が暗い。今にして思うと、視力に異常が起こりつつあったのかもしれない。

薄暗いメインストリートに「講師　牧太郎さん」のポスターが張られているのには、気恥ずかしく、参った。

「牧さんの場合は、『サンデー毎日』の編集長のほかに、テレビのコメンテーターでしょう、有名人ということなんですよ」と地元の有力者は言う。もちろん、これはお世辞だが、ポスターは、遠い東京から講師を呼ぶ「心遣い」なのだろう。それにしても、寒くて仕方なかった。

週刊誌編集長

当時、僕は週刊誌の編集長をしていた。日本最古の週刊誌「サンデー毎日」である。

「最古」というとライバルの「週刊朝日」から文句が出そうだが、「最古」争いには、こんなエピソードが残っている。

大正十年の秋ごろ、僕の所属する毎日新聞社は「週刊」のメディアを考えていた。ある日、毎

日新聞の本社に近い大阪・北新地の飲み屋で、社員の一人が「社長は新しい雑誌の発行を考えているらしい」と何気なく話してしまった。「企業秘密」という意識はなかったのだろう。

たまたま、そこにライバル、朝日新聞の関係者がいた。彼は「毎日が考えている新しい雑誌は旬刊だろう」と思い込んだ。「上旬、中旬、下旬」の旬刊である。

当時の生活サイクルは「週」ではなく「旬」であった。

朝日は「毎日が春から出すというのなら、一日でも早く旬刊を出す」と翌年の二月、「旬刊朝日」を発刊した。

実は、ライバルの毎日新聞は欧米の「日曜新聞」を雑誌化しようと考えていた。「旬刊」とは、土台、発想が違う。四月、毎日新聞は「サンデー毎日」を出す。あくまでも「週刊」にこだわったのである。朝日はすぐに「旬刊朝日」を「週刊朝日」に切り替えた。「サンデー毎日」と「週刊朝日」はこんな経緯で「週刊誌最古」を分けあっている。

だからといって、出版業界は「老舗(しにせ)だからいい」という訳にはいかない。「おっとりした社風」の毎日新聞社は、どちらかというと刺激的な紙面を好まない。「サンデー毎日」は「売れればいい」式な哲学に与(くみ)しない。だから、でもないが、部数は芳しくない。しかし、その分、信頼性は高い。

政治部の記者だった僕が、週刊誌畑に来て三年余りになる。前任者の鳥越俊太郎が「テレビで

飯を食う」と言って退社し、後任を仰せつかって、二年四ヵ月たっていた。

「部数は力」と信じてガムシャラに走っていた。新聞社の制約の中で刺激的な紙面を作ろう、と心がけ、部数も徐々にではあるが伸びつつあった。

この年、業界雑誌に「不調の総合週刊誌の中で『サンデー毎日』と『プレイボーイ』だけが、部数を伸ばした」と指摘され、うれしかった。しかし、売上げトップを争う「週刊現代」「週刊ポスト」「週刊文春」には、部数ではまだ水をあけられていた。

頭の片隅には、いつも「売上げ」がある。「サンデー毎日」の発売日の月曜日。朝四時に目を覚ますと、ベッドから這い出して、カーテンを開ける。こわごわと、空を見あげる。晴れていれば万歳。もし、ドシャ降りだったら通勤途中のビジネスマンは、週刊誌なんか買わない。傘を持った通勤に、週刊誌は邪魔になる。

週刊誌は発売初日、全発行部数の約四割を売る。翌日には、別の週刊誌がキオスクの店頭に並ぶ。勝負は初日。月曜日の雨は最悪である。天気が、それほど販売成績に影響するとは、思わなかった。

「雨空」「曇天」にやけ酒を飲むことだってある。〝お酒〟に逃げるところもあった。

慢性的な睡眠不足。一日の睡眠は、四、五時間。それでも、このペースで、五十歳まではいける、と信じ込んでいた。

週に二回、テレビのコメンテーターもこなし、時には、この日のように、社業がらみの講演に飛んで行く。「化け物だ」と陰口を言われるのが、むしろ心地好い感じさえした。「過信」という勘違い――。

「人生は短い。こんな生き方をしていていいんだろうか」と思ったりするが、先のことは先のこと。取りあえず、いまを全力疾走すればいい。この過信が「地雷」を踏む前兆のすべてだったのかもしれない。

この日の青森の講演の依頼は、販売局からだった。新聞社には編集局、販売局、広告局、出版局などのセクションがある。販売局は一言で言えば、新聞を売るところ。全国にある「毎日新聞販売所」を統括して、売上げを伸ばす使命を持っている。

「販売店主催の催し物。予算が少ないのだろう。著名人という訳にはいかない。で、お前さんにお呼びが掛かった、というワケさ」

話に自信があるわけではないが、「社業に関係する講演」は引き受けることにしていた。実は、この種の講演アルバイトは、メリットが多い。僕の話を聞いた何人かが、週刊誌の新しい読者になってくれる。二人でも、三人でもいい。読者が増えるのが、助かる。それに、講演は率のいいアルバイトで、編集部の仲間を飲み食いに誘う資金になる。懐は、いつもピーピーしていた。わ

が社の給料は、世間並みだが、出費が多すぎる。ともかく、会社が企画する講演は、いいアルバイトである。まして、ポスターまで張って、三百人もお客さんを集めてくれる。感謝した。

この夜は普段よりオーバーして、一時間半ほど喋った。何を話したか、忘れている。

講演を終わると、ホテルに近い寿司屋に入って、一人で酒を飲んだ。ビール一本。それに多分、日本酒三合、だったような気がする。寿司屋を出ると、雪が舞っていた。雪が降る光景は、美しいハズだが、街はなぜか、嫌になるほど寂しくみえた。

「小雪払って、今夜もひとり」――演歌好きの僕は、それでも、森進一の「盛り場ブルース」を口ずさんで、ホテルに戻った。

「地雷」を踏んでしまう前日をこうして終わった。僕にとっては、典型的な「サラリーマン雑誌編集長」の一日である。

その年、東北地方で二度目の雪。僕は、刻々と「人生最悪の瞬間（とき）」が近づいていることを、まだ、知らなかった。

「中吊り広告」を作らなければ

翌日の十二月四日、ＪＡＳ二二四便は定刻通り午後一時、羽田空港に到着した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com